［新連載］

陸前地方の天然スレート建築

第1回

東京駅のスレート屋根をみつめながら

大沼正寛 | 東北工業大学 教授
阿部 正 | ノーマルデザインアソシエイツ 主宰

左：大沼正寛、右：阿部 正

スレートと東京駅

スレートとは、薄く「へき開」する粘板岩もしくは頁岩のことで、屋根・外装材として用いられる。へき開とは、結晶や岩石の割れ方が、ある特定方向へ割れやすい性質をもっていること。天然と呼ぶのは、これを模して石綿などを混ぜて成形したセメント系人工スレートと区別するためである。厚さ4～6mm程度に割られ、形状も均一に切り揃えられながら一枚ごとに微妙な表情をみせる。ドイツ、フランス、イギリスなど、海外の歴史的町並みではおなじみだが、工業化建材しか見なくなってしまった現代日本においては、希有な存在と言える。

2012年に復原された東京駅丸の内駅舎（旧名「中央停車場」、1908年着工、1914年竣工）も天然スレート屋根である［写真1］。設計を手がけた辰野金吾は、赤レンガとスレートの組み合わせを好んで用いた。この東京駅に使われたスレートは、当初32万枚［文献1］、今般の修復では、じつに40万枚にのぼる。

これが天然素材・手加工によるものであることに驚かされるが、それらはもと宮城県石巻市雄勝町産だった。のちの修復では、宮城県登米市登米町など他地域の産材も供されたが、その岩体は、いずれも宮城県北から岩手県南、いわゆる陸前地方（≒旧仙台藩域）に今なお偏在している。このため、本稿では「陸前天然スレート」と呼ぶこととしたい。

今般の復原工事においても、7～8万枚は再び陸前天然スレートの新材・再利用材が用いられた（その他8割強はスペイン産）。とくに、丸の内中央駅舎正面の皇室出入口には雄勝産新材が、主要なドーム部には再利用材が葺かれている［写真2］。これは、多くの人々の思いと行動が実現させたものだ。というのも、当初より陸前産を用いる重要性は設計に盛り込まれていたが、東日本大震災による大津波は、保管・洗浄されていた貴重な資材を流出・散逸させてしまった。竣工を遅らせることの社会的影響や資材の損失もあって、一時はすべて輸入材もやむなしとの判断もあったという。だが、そのような惨事のなか、宮城の屋根工事関係者は被災しながらも、必死で一枚一枚を集めたのである。すべてを回収できたわけではないが、少しでも活かすことが復興の象徴ともなる。作業にあたった人々はもちろん、その声を届けた人々、工事の調整にあたった人々、そして、それらを

写真1 「東京駅丸の内駅舎」中央正面

写真2 東京駅屋根ドーム部

図1　陸前地方にて視認したスレート民家の分布マップ（2011-2015、筆者作成、文献4初出、町村名は昭和30年頃のものを下地とした）

葺き上げた人々と、多くの思いが結集した屋根なのである[註1]。

筆者らは、こうした人々の影で学んでいるに過ぎないが、この「表通りのスレート建築」の一方で、陸前地方を中心に、同じスレートを冠した民家建築が広がっていることに着目している。その数たるや、管見の限りでも大小あわせて2,000棟[図1]。未確認のエリアも残されている。建築やデザインの世界では「地と図」が常に論ぜられるが、東京駅のスレート屋根を「図」とするなら、陸前地方の民家は「地」をなす資産群であり、相補的な存在とも考えられる。

それにしても天然スレートは、なぜこの地で開発されたのか。どのように広がり、何を伝えているのか。さらに、日々減りゆくスレート民家は、どのように活用保全できるのか。建築と素材、その地域性と社会的意味をひも解いてみたい。

近代洋風建築とドイツでの技術修得

東京駅は、わが国の天然スレート葺きの建築としては、古いほうではない。この材料が活躍するのは、欧化をめざした「洋風建築」においてである。近代化の礎として西洋文化の体得が急務だった明治期、西洋で用いられたスレートを同じように使うのは当然だった。確かに、和瓦の重厚な縦棒が目立っては、「洋風をまとう」ことにはならない。かくして、全国の官庁施設、銀行、西洋館等、スレートを冠した代表的な日本の近代建築群が出現していった。現存する遺構でとくに早い時期のものとして、たとえば北海道庁（1888（明治21）年）[写真3]、関西では帝国京都博物館（現 京都国立博物館明治古都館、1895（明治28）年）が挙げられる。

写真3　北海道庁

ここで、西洋とひとくくりにするのをやめ、藤森照信『日本の近代建築』（岩波新書、1993年）[文献2]を引用し、とくにイギリスとドイツの文化的影響を確認しておきたい。もちろん近代建築史においては、幕末に上陸した洋式建築、その後に華開く擬洋風建築、さらに明治初期の外国人技術者らの影響などをきちんと考慮するのが本来的であるが、ここでは省略する。

辰野金吾（1854～1919）は、御雇外国人として来日したイギリス人、J・コンドル（1852～1920）に建築様式を学んだ。コンドルは、建築家であると同時に様式史の探求者でもあった。辰野はさらに渡英して（1879～1882）、各時代の建築様式を観察し、イタリアやフランスも訪れ、日本が範とすべき様式を模索する。帰国後は、工部大学校造家学科（現 東京大学建築学科）で教授となり、のちの日本建築学会を設立、多くの後進を輩出するとともに、記念碑的建築を手がけた。もちろん辰野がすべてを左右したわけではないが、上記より、日本の近代建築において、イギリスの影響を欠くことはできないだろう。

一方、1886（明治19）年、外務卿の井上馨と警視総監の三島通庸は、欧米と遜色ない官庁集中計画をめざし、コンドルや英国王立建築家協会に相談する。だが、期待通りの結果や返答が得られず、新興ドイツ帝国からH・エンデ&W・ベックマンという2人の巨匠建築家を招へいする。また日本からは、エンデ&ベックマンの勧めに従い、妻木頼黄、渡辺譲、河合浩蔵の3建築家に加え、大工、左官、石工、屋根職、煉瓦工、ペンキ職、錺（かざり）職、彫師、ステンドグラス職、セメント技師の総勢20人がベルリンへ渡る。この屋根職こそが、日本のスレート葺き職人の祖・篠崎源次郎であった。

1887（明治20）年前後からの建築群は、辰野らイギリス系、妻木らドイツ系、さらにはフランス系など、さまざまな流派が華開くこととなったが、いずれもスレートを用いたから、篠崎以降の屋根構法に関してはドイツ系が基礎となったと言える。そののち約四半世紀を経て、洋風歴史主義建築の終盤期を飾ることとなった東京駅は、イギ

リス流をくむ設計のもと、ドイツ流をくむ屋根が載った融合様式の一例と解することもできよう。

さて、幕末・明治初期からスレート技術導入期の様子と篠崎の人物像は、石田潤一郎『スレートと金属屋根』(INAX出版、1992年)[文献3]が詳しい。日本人が初めてスレート葺き洋風建築を目にしたのは、幕府遣外使節(1862(文久2)年)に遡るという。以下、部分引用する。

人家の屋根を、薄さ二分ほどの鋲板の様なる物にて葺きたるあり

とは、使節団の一人、淵辺徳蔵の日記の一文である。日本では、石屋根のある地域は諏訪の鉄平石など局所的であったから、その驚きようが想像される。その後の国産スレートの開発プロセスは次号に譲ることとして、いよいよ上述の西洋建築希求とスレート屋根の試行錯誤がはじまり、上述の篠崎の渡独につながる。

研修団を率いた建築家の一人、河合浩蔵の回想によれば、

目方が23, 4貫(85〜90kg)もあって、身長も外国人だけあり、……実に器用な男で、(中略)算がうまいので親方から非常に愛され……スレート葺きをよく覚えてきた

などとあり、1888(明治21)年の帰国後、帝国議会仮議事堂の屋根を担当するや、工事中の暴風雨に遭っても1枚も飛ばない仕事を納め、注目された。翌年には、銀座2丁目の赤レンガ建築のなかに「スレート商会」なる合資会社が設立される。理事長は堀江小十郎、実務は篠崎が担当したという。

被災集落をみつめながら——以降の序論として

その後、篠崎は1890(明治23)年に、産地雄勝を訪れたと伝わり(地元宮城での口伝)、1899(明治32)年に没している。没年の3年前、1896(明治29)年には明治三陸津波があったから、その時点でも産地では混乱があっただろう。ともあれ、東京駅の屋根は篠崎の仕事ではない。おそらく彼に学んだ第2世代が手がけたのであろう。

話を陸前地方に戻そう。洋風建築が華やかに建てられた時代、石材産地ではどのようなことが起こっていたのだろうか。また、洋風建築のトレンドが過ぎ去ったのち、供給先はどのように変容したのだろうか。

東京駅の屋根は、大雑把に言えば、当初が雄勝産、戦後修復時が登米産で(ただしいずれも、周辺の産材が加わっていないかは断言できない)、時代の境目、地方の境目をつないでいる点でも、一つのランドマークと言える。これを目安とすると、東京駅の雄勝産時代までは、近代洋風建築の需要が続いた「近代前期」にあたり、登米産時代は、トレンドが過ぎ去った「近代後期」と大別できる[表1、文献4]。

そして地元民家もまた、近代前期は限られた上層民家に多く葺かれ、広く普及していくのは近代後期に多い。しかも後期の盛期は、昭和戦後とみられるのである。すでに法的整備が進み、現代につながる建築生産体制が都市部で常識となっていたであろう経済成長期に、石材産地では依然として、地域資源を安価に用いた「近代民家」として、普及が持続していた。このこともじつに興味深い。

表1　スレート葺きの近代建築と災害の複眼概略年表

	スレート葺き近代建築等	主な災害史
近代前期	◇1879=M12 辰野金吾、渡英 ◇1886=M19 篠崎源次郎ら渡独 ◆1888=M21 北海道庁舎 ◆1895=M28 帝国京都博物館 ◆1914=T03 東京駅	1896=M29 明治三陸津波
近代後期	◆1952=S27 東京駅改築	1923=T12 関東大震災 1933=S08 昭和三陸津波 1945=S20 第二次大戦終戦 1960=S35 チリ地震津波

凡例…◇スレート関係の出来事　◆スレート建築の竣工年

そこで次号からは、まず石材資源と産業の起こりについて紹介したのち(3月号)、全国の近代建築と石材需要(4月号)を経て、地元スレート民家の近代前期(5月号)、近代後期(6月号)、というかたちで各地の集落・民家をみていく。さらに、地元技術者に聞く職人論(7月号)や、茅葺きと絡む屋根替えについて(8月号)などと、陸前地方の農山漁村住宅史に話は及ぶ。もちろん、そうしたローカルな話題のみならず、全国的な動きとの比較考察を含めていくつもりである。

この広く長い物語を夢想しながら、改めて天然スレートのメッカ・雄勝に降り立つと、何とも複雑な思いにかられる。筆者が時折訪れた2000年から2005年頃は、500棟をはるかに超えるスレート民家群(主屋や付属屋)が点在し、雄勝町の旧名・十五浜村そのままに、浜ごとの家並み景観を見せていた[写真4・5]。その際のスレート屋根の比率は、住宅地図等と照合した結果15%ほどで、他はセメント瓦などが多かったが、昭和30年代には、ほぼすべての建物がスレートだった浜も多かったという。石屋根で埋め尽くされた漁村集落は、想像するだけでも小躍りするが、幻影はわずかな古写真などに残るのみである。中心に建っていた雄勝硯伝統産業会館も屋根の半分はスレートで、津波をはじめから想定し、2階に収蔵庫を上げておいたことによって展示品を守った[写真6]。だが、最終的には防潮堤計画の障害となり、解体された。こうして、新旧問わず陸前地方沿岸部の多くの建造物が津波に飲まれ、あるいは解体された。エリアによっては、津波よりも公費解体によって意図的に解体してしまったものが多いことも、読者の皆さんにも知っておいていただきたい点である。

この陸前地方において、災害史の視点が重要であることは論を待たないし、戦前・戦後などといった日本史共通のエポックとともに、

写真4　石巻市雄勝町水浜・震災前風景（2005年）

写真5　石巻市雄勝町分浜波板・震災前風景（2005年）

複眼的な歴史観をもってみつめる必要がある。それゆえ、地元側から記述していくことが不可欠であり、天然スレートはその道しるべの一つとも考えられる。紆余曲折をお許しいただき、全11回の連載にお付き合いいただければ幸いである。

写真6　津波に耐える雄勝硯伝統産業会館新館

註1　佐々木信平氏（石盤葺国選定保存技術者、東京駅の改修工事にてスレート屋根を統括）

参考文献

1. 大内田史郎「丸の内本屋の天然スレートの意匠に関する考察」（『日本建築学会計画系論文集』第593号、pp203-208、2005.7）
2. 藤森照信『日本の近代建築』（岩波新書、1993年）
3. 石田潤一郎『INAX ALBUM5 スレートと金属屋根』（INAX出版、1992年）
4. 「宮城県近代和風建築調査報告書」（2015年）所収のスレート民家に関する記述（執筆…大沼正寛）

写真1〜5…大沼正寛撮影
写真6…杉山久男氏（雄勝町）撮影

おおぬま・まさひろ

1972年生まれ。東北大学大学院修了、博士（工学）。一級建築士。那須建設、伊藤邦明都市建築研究所、東北文化学園大学助手・准教授、東北工業大学准教授を経て2016年より同教授・デザイン工学専攻長。専門は建築設計・地域計画・建築歴史地理

あべ・ただし

1970年生まれ。（株）建築モード研究所、岩井紘子建築設計事務所を経て、2001年ノーマルデザインアソシエイツ主宰。2018年兼東北工業大学大学院ライフデザイン学研究科デザイン工学専攻（大沼研究室）在籍

自習型認定研修の設問

設問1

2012年に復原された東京駅の屋根に用いられている陸前天然スレートはおよそ何枚か。

a. 7〜8万枚
b. 32万枚
c. 40万枚

設問2

洋風建築とスレートをめぐる建物・時事の年代順として正しいものはどれか。

a. ①帝国京都博物館竣工
②東京駅竣工、③北海道庁竣工
④明治三陸津波

b. ①帝国京都博物館竣工
②北海道庁竣工
③明治三陸津波、④東京駅竣工

c. ①北海道庁竣工
②帝国京都博物館竣工
③明治三陸津波、④東京駅竣工

認定教材の設問への回答は、
CPD情報システムのページ
https://jaeic-cpd.jp/
にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。
※自習型教材の選択欄における会誌『建築士』選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみの表示項目になります。